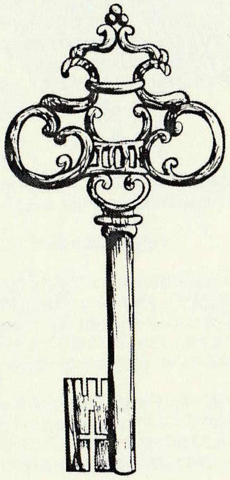
Seven princes of the thousand years Labyrinth
On Your Side

Seven prince of the thousand years Labyrinth

千年迷宮の七王子

OnYourSide



ハル有

表紙+本文イラスト/花鶏ハルノ
SS/相川有

千年迷宮の七王子番外SS

千年迷宮の贈り物

ごあいさつ

花鶏ハルノ(表紙・挿絵)

このたびはサークル「ハル有」にお立ち寄り下さりありがとうございます。
クリスマスSSを再録するにあたり、一度イラストを見返すなどしておりましたが、
クリスマスイラストを描き、SSが公開されたのが去年の冬のことで。
気が早くはありますが、あっという間の1年だったなあとしみじみ思いました…。
描き下ろしSSと合わせてどうぞお楽しみください。

相川有(SS)

このたびは「OnYourSide」を手に取って頂きありがとうございます。
この本は千年迷宮の七王子の番外編SS(ショートストーリー)を２本収録しています。

「千年迷宮の贈り物」

Twitterにて去年の年末に８日？間にわたってアップしたクリスマスSSになります。
Twitterでどうアップすればいいのか迷ったあげく、
画像四枚でキャラ一人分のエピソードを書いていくという形になりまして…
一文字削ったり、改行を減らしたりと、
なんとかその中に収めるという、よくわからない部分をがんばっていました。

お話は商業連載中だった「千年迷宮の七王子」のキャラクターたちが
出会って初めてクリスマスを迎えるという内容です。
時系列としては、「永久回廊の騎士」よりはあとということになります。
タイタスが自領民との間で和解が進みつつあるのが少し見て取れます。

その前の年には、四コマ漫画などと言う形で彼らそれぞれのクリスマスを
描いたのですが、みんな揃ってどうするのかな？というのを描くのが楽しみであり、
しかし「クリスマス」という行事を描くにあたり、西洋風ファンタジーにある
「宗教観をどう描くか(描かないか)」の問題にやや頭を抱えたりもしました。

「OnYourSide」

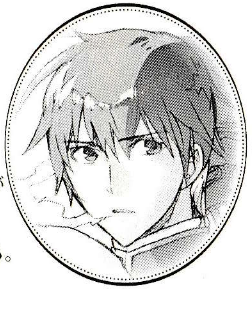
この本のための書き下ろしSSです。
「贈り物」の続編でもあり、時系列としてはコミックス「暁の王」の中のエピソード
「亡国のシャハル」の後日談にもなっています。(「再会の時」よりは前になります)
空いた七侯の椅子をめぐり元七侯たちの間で一騒動起きるのですが
彼らの若い頃の因縁が原因で…というお話です。
登場人物のひとり、ロレンスのバックボーンが語られる内容となっています。
ロレンスの悩みはこの先も続いていくのですが
生温い目で見守ってくださるとありがたいです。

2017/08ハル有

「千年迷宮の七王子」主な登場人物紹介

※各年齢はユアン即位の年の年末時のもの

ユアン・ジュノー＝イグニス（16）
マグナ・エンデトリア帝国の新皇帝。慣れない暮らしのなかで多忙な日々を送っている。即位する前は、剣士ロレンスに憧れる、ひとりの平凡な少年にすぎなかった。



ロレンス・アクロイド（18）
マグナ・エンデトリア帝国騎士団長。アクロイド家の養子だが実は前皇帝の一人息子。ユアンに出会って以降絶対の忠誠を誓っている。

オーガスト・モーガン（21）
帝国七侯、パルヴァ＝ノーテ領主で法相を務める。豪商モーガン家の御曹司。

メサイア・リード（19）
帝国七侯、イスカ＝リンナム領主で宰相を務める。幼い時に鉱山労働者の両親のもとを離れ過激派の教育機関でエリート教育を受ける。

ザン・オーデュポン（23）
帝国七侯、オクト＝ノクテ領主で七領相を務める。元カリスマ歌手で幼少時より公演で全国を回っていた。

ギデオン・レッドフィールド（27）
帝国七侯、ソレム領主。財務相としてとくに多忙な日々を送っている。癒やしを求めている。

タイタス・ラム（19）
帝国七侯、ルーメン領主。元盗賊団首領。ルーメン国民の間で新領主になったタイタスへの評価が真っ二つに割れている。

I

「毎年新年はどう過ごしているの？」

二人で簡単な夕食を取っているときにユアンがそう訊ねると、ロレンスは短く、

「家で」

とだけ答えた。

「そういえばこの城に来る前は、学生寮で暮らしていたんだっけ」

「ああ、冬の休暇には必ず実家に戻っていた」

今は騎士団長という地位にあるロレンスも、半年前には一介の学生の身分にすぎなかったのだ。そう思うとユアンは急にしみじみした気持ちになって、目の前の騎士団の簡易制服をまとった姿を眺めた。

「なんだ？」

「いや、あの帝王杯無敗の剣士も休暇には普通の人みたいに家族と過ごしていたんだなあって」

「俺はいつも普通だが…」

（普通ではないと思う…）

とは口に出さず、ユアンは曖昧に笑みを浮かべた。

この帝国の中枢からはるか遠くに浮かぶ島の、そのまた外れで育った少年にとっては、聞こえてくる年若き剣士の名声は夢のように眩しく、まるで物語に出てくる英雄であるかのように焦がれていたものだ。

あらためてその"英雄"が自分に剣を捧げたことを思い出すと、急に目が廻るような感じがして、ユアンは慌てて話題を変えた。

「そういえばさ、やっぱり今年の冬は、みんなに休みをあげられそうにないんだ」

わかっているというようにロレンスは頷いた。

「それは皆覚悟しているだろう。それぞれがこういう立場になった時点でだが」

ある程度はユアン自身も覚悟していたが、まさかここまで忙しくなるとは思わなかったのだ。

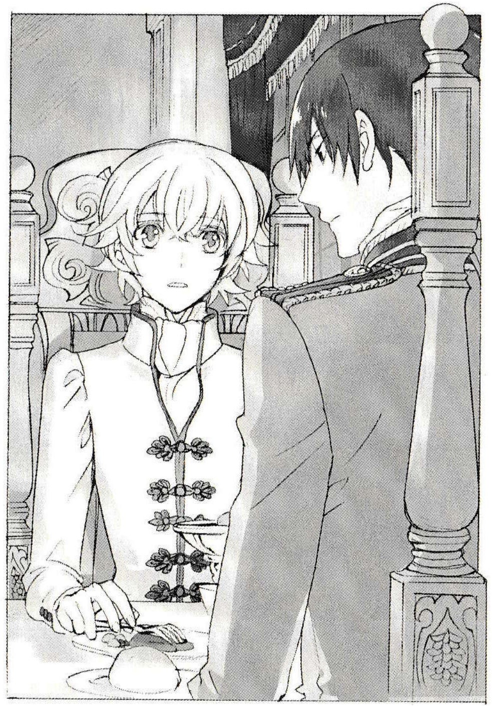
「俺はさ、クリスマスこそマーレ島に帰れるかなあと思ったんだけど」

「そういえば、なかなかユアンの兄さんに会えないな」

マーレ島にいる兄や幼なじみとは何度も手紙のやりとりだけはしているが、いまだに再会できないでいる。

「俺、皇帝ってもっと自分勝手に各地を回ったりできるのかと思ってたな…」

「そのうちできるようになる」



「だったらいいな。そのうちロレンスの育ったオウラードも見てみたいし」
ユアンがそういうと、ロレンスはほんの微かに頬を緩めた。
「ぜひ案内させてもらう」
今はロレンスの義理の弟のフェイが、彼らの実家のある北方のオウラード領に滞在していたが、それもただの帰省ではなかった。
ロレンスが七侯を辞退した経緯で、オウラードは現在領主不在の状態が続いている。
いまのところはとくに混乱は無いようだが、様子を伺うためにフェイにはかなりの頻度で皇城とオウラード領を行ったり来たりしてもらっていた。
「フェイはそのまま新年を実家で迎えるそうだ」
ロレンスが食事の手を止め、窓の外を見ながら言った。
外はもう暗いから、燭台の灯りに照らされた二人が窓の硝子にゆらゆらと映り込んでいる。その向こうに庭園の木々の枝が、陽が暮れた空に網の目のようなシルエットを作っていた。
ロレンスは故郷を思い出しているのだろう。
オウラードはこのソレムからそう遠くはないが、もうずいぶん雪が積もっていると聞く。
いきなり兄弟が二人とも帰ってこないとなると、アクロイド家も寂しくなるから、せめてフェイが帰省してくれているのはよかったなとユアンは思った。話に聞くロレンスの養父母はすごくいい人たちで、そんな人たちを悲しませたくはなかったからだ。
「もしかしてロレンス、本当は今年も帰りたいなって思ってたりする？」
ごく軽い気持ちで訊ねてみたのに、珍しくロレンスが迷うように口ごもったのでユアンは少し驚いた。

（そんなに帰りたかったのかな？それともなにか事情がある…のかな…？）
なにか言いたいそぶりを見せつつ、ロレンスが口を閉ざしたので、その日はそれ以上なにか訊くこともできず、ユアンは一人寝室に引き上げた。
半年前に出会い、みんなで過ごす初めての冬。
まだまだお互いに知らないことの方が多い。
（ロレンスは大晦日が誕生日だし、休暇の代わりになにか贈り物ができたらと思っていたけれど…やっぱり休暇のほうがよかったのかな？）
（そもそもみんなが何を望んでいるとか、俺全然わかってないよなあ…）
いたらない自分が歯がゆく、その夜ユアンはしばらく考え込んだのだった。

II

「お前、ロレンスとケンカでもしたの？」
とオーガストが訊いてきたのでユアンは慌てて首を振った。
「そういうわけじゃないよ」
「ならなにをギクシャクしてんだよ」
執務室のデスクの上に、書類を放り出すや否や彼はマフの中に手をひっこめた。
今日は深い緑のドレスに銀狐のストール、それにお揃いのファーで作られたマフをつけている。同じ銀狐の帽子からは飾りのボンボンがいくつか垂れ下がって、カールした髪の中にふわふわと見え隠れしていた。
こうやっていると年下の少女にしか見えないが、実のところオーガストはれっきとした男性だし、ユアンより五つほど年上だ。
「あのさあ、部屋の中でもその格好…寒いの？」
「寒いに決まってんだろうが！あの冷血宰相どのが暖炉の薪までケチケチしやがって！」
「メサイアは冷血じゃないよ…。むしろ熱血だからケチケチしてるんだよ」
たしかに執務室は広いので、暖炉の火を弱めにしていると手がかじかんで辛いほどだった。
それだけに早く仕事を終えようとがんばれるから、寒い部屋というのもあながち悪いことだけでもないなとユアンは考えていた。
「それにしても知らなかったなあ…オーガストってすごい

寒がりだったんだ」
「すごくはない。普通だし、いまは僕の話をしてんじゃないんだよな」
部屋の入り口に立つロレンスをちらりと見やって声をひそめる。
「いったい何があったんだよ?」
「ロレンスはいつもどおりだと思うよ。ただ俺がさ…なかなか直接訊けなくて」
なに?と首を傾げるオーガストの唇がちょっと紫色になっている。寒さに耐えながら会話に付き合ってくれているのだと思うと可哀想になり、ユアンは早口で答えた。
「ロレンスは誕生日も近いし、休暇もあげられないから、なにか代わりに欲しいものはないのかなって」
「欲しいものか…」
じっとしていると寒さが増すのか、足を交互に動かしながらオーガストは考え込んだ。
「奴はあれで大抵のものは手に入る立場だからな。それに今年はもう一生もののお宝が…」
とユアンを見ながら呟くので、今度はユアンがなに?と訊ねる番だった。
「いや、まあいい。なにか奴が喜ぶような外国の剣か、珍しい馬具でも入ってないか、ちょっと実家のほうに探りをいれてみるよ。それでいいか?」
「え?ほんとに?でも俺現金持ってないし、たいして払えないよ…」
そう答えるとオーガストは「出世払いでいいぞ」とため息をついて肩を落とした。
これ以上どう出世すればいいのかはわからないけど…とユアンは内心考えながら、とりあえずはその申し出に甘えることにした。
城の中で誰かの仕事を手伝ったりして、少しずつでも返

していければいいだろう。
「メサイアがいっしょに財政を考えてくれるのはありがたいんだが、僕はさ、僕の皇帝には貧しい思いをして欲しくないんだよな。なんてたって『この僕の』皇帝なんだし」
「俺は別に貧しくはないよ」
「まあお前からしたらそうかもしれないんだけどさ」
マーレ島を丸ごと買えてもおかしくない一族の御曹司だったオーガスト。そして毎日鶏の世話をしながら学校に通っていたユアン。二人の間にいったいどれほどの違いがあるのか、ユアンにはまったく想像もつかないことだった。
「だったらオーガストも欲しいものなんてなさそうだなあ」
「僕の今欲しいものは南国への旅行だな!」
「だから休暇は無理なんだって」
言いながらユアンは困惑した。
ロレンスへの贈り物がなんとかなりそうだと思ったのに、今度はオーガストへの新年の贈り物が悩みの種になってしまった。
「じゃあまたな!」
小走りで部屋を出て行く可憐な後ろ姿を見送りながら、ユアンはまた考え込んでいた。
島に居た頃は、贈り物の中身に悩む必要などなかった。
だれが今孵りたてのひよこを欲しがっているのか、刺繍の入ったリボンを集めているのか、靴の修理が必要な頃合いなのか。小さな集落の中でお互いに知らないことなどなかったからだ。
うーんとうめき声をあげていたら、遠くでロレンスが大丈夫かと気遣うそぶりを見せたので、なんでもないとユアンは慌てて手を振った。

III

「感心しませんね」
とメサイアが言うので、ユアンは反論した。
いつも最後には彼が正しいのだとわかっていても、今回は抵抗せざるをえない。
「ロレンスの誕生日は毎年家族が祝っているのに、今年はそれがないなんて…せめて俺に何かできたらなって思うのが間違いなのかな」
「君がどうしてもというなら、もう僕は止めませんが」
呆れるでなく、突き放すわけでもなく、いくぶん普段より柔らかい調子でそう言われたので、ユアンは逆に黙り

込むしかなかった。

　国が大変な時期に、皇帝であるユアンが自分のためだけに労力を割(さ)くことを、生真面目(きまじめ)なロレンスがはたして手放しで喜べるのか。

　それは疑問だとメサイアは言うのだ。

　確かに…とユアンは考えた。

　正直をいうと俺は俺自身が彼になにかしたかっただけで、相変(あいか)わらずロレンスが何を望んでいるかなんて知らないままなんだ。

「わかったよ…。ロレンスについては急がずにもうちょっと考えとく。…ところで、オーガストにはなんとか休暇をあげられないかな？このままだと寒さで死んじゃうかもしれないし」

「死にはしませんよ」

　と、今度は冷たい口調でメサイアは言い放った。

「今無理に休暇を取ることのほうが、後に死屍累々(ししるいるい)な状況に追い込まれると本人もわかっているでしょう。逆に迷惑なので、そっとしておいてやってください」

「だったらせめてもの代わりに、オーガストのまわりでは暖炉の火を強めにしてあげて欲しい」

「そこまで寒いですか？」

　メサイアは理解できない、とでもいうように眉をひそめた。

「どの部屋も充分に暖かい気がしますが。どうしてもというなら部屋を狭くしてはどうです？」

「相変わらず大胆(だいたん)すぎる発想だけど、それってかなり庶民的な解決法だよね…」

　オーガストが気に入るかは謎だなあとユアンはため息をついた。

「メサイアってもしかしてすごく寒さに強い？」

「強いというか…まあそう言われればそうかもしれません。僕の地元はこの時期もっと寒いですし」

　メサイアの出身地といえばイスカ領だが、たしかに季節を問わずに気温が低いことで有名だった。

　位置的には皇帝領からそう遠くはないのだが、海に面さない内陸部であるうえに、全体的に標高が高く、局地的には北のオウラードより冬が長い地域もあるという。

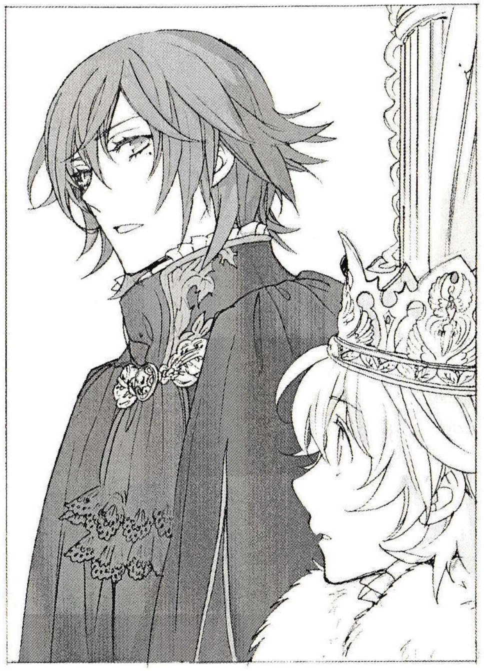
「そういえばメサイアは、地元では新年をどんなふうに迎えていたの？」

「僕の育った教育機関には休暇なんてものは存在しませんでしたが」

「じゃあそこへ入る前は？」

「普通に…家族と過ごしていた記憶があります」

　メサイアの菫(すみれ)色の瞳がわずかに青味を帯びた。



　本人も気付いていないだろう、穏やかな表情が珍しく、ユアンは思わず見入ってしまう。

　今はその家族はどうしているの？とユアンには訊けなかった。

　有能な探偵だったメサイアがこれまで両親の状況を探らなかったはずはないし、少なくともこれほどの地位に就(つ)いた時点でなんらかの接点は持とうとするはずだった。

　なのに今までいっさい話題に上がらなかったということは、なんらかの理由で話さないか、話せない理由があるのだろう。

　ユアンが黙っていると、メサイアは表情を隠すように少し俯(うつむ)き加減になり、口元に笑みだけ浮かべた。

「鉱山労働者の街でも多少はお祭りめいた空気にはなりますよ。うちは貧しかったので、なにか特別な準備ができたわけではなかったのですが…」

　そこで少し言葉を切り、彼は持っていた羽根ペンを手の中でくるくると弄(もてあそ)んだ。

「そういえば母が家の外に、雪で小さなかまくらを作って並べてくれました」

　中に短く切ったロウソクを灯(とも)すのだという。

　夜になってそれを家の窓から眺めると、暗闇に点々と光が並び、まるでそこに現実には存在しない、別の道が続いているように見える。

「ここではないどこかに続いているのよ、と母が話してくれました」

「ここではないどこか…」

　幼いメサイアは、その光の列がどこに続いていると想像したのだろう？

　ユアンが顔を上げると、ふとお互いに目が合った。

　メサイアはユアンを「夢」だと言ったが、本当に自分は今もそれを見せてあげられているだろうか？

　そう思うと、ユアンの胸は少し苦しくなった。

Ⅳ

「俺は部屋を狭くするっていう考えに賛成だな」
　書類から目も上げず、ギデオンが手を上げて賛成のポーズをとる。
「だいたい広すぎるんだよ、どの部屋も」
「はあ？広いものを狭くするのにも予算てものが必要なんだぞ。それこそ薪代なんかより莫大な予算がな！」
　オーガストが机の端をばんばんと叩いた。
「落ち着きなさい、オーガスト。ギデオンの言うことをいちいち真に受けてはいけません」
　とザンが眉根を寄せ、静かに言った。
「またどうせ冗談なのですよ」
「言っとくけど冗談じゃないからな」
「もうどうでもいいよ、おっさんの意見なんか！」
「静かにしろ、枢密院会議の最中だぞ」
　ユアンの後ろで黙って立っていたロレンスが、とうとう口を出した。
　会議とはいってもタイタスは自国領のルーメンに滞在中だし、議長で引き締め役のメサイアも別件で出席を見送っていたから、結局七侯が揃わず、自然と皆の気も緩んでいるのだった。
「そもそもあの血も涙もない宰相どのが燃料費ごときをケチるから…」
　とオーガストが唇を尖らせる。
「そこまで寒いのなら、そのひらひらした格好を止めたらどうだ」
　ロレンスが冷たく言った。
「お前は知らないだろうが、この格好のほうが暖かいんだよ。僕がこの下にどれだけペチコートを重ねていると…」
「お前の下着の枚数など知ったことではない、というかまったく知りたくはない」
　ロレンスは普段は物静かだが、幼なじみの女装に関しては相変わらず辛辣だ。
　ともかく今日はもう収集がつかないなとユアンはため息をついた。
　こういう時は他人にかまわずさっさと物事を進めてしまうメサイアの存在が恋しくなる。
「今日はこれで終わりにするよ。どうせメサイアが戻らないとなにもまとまらないと思うし。それから部屋の大きさがどうのは、ただの軽口だから気にしないこと」
　ユアンが言うとオーガストはやれやれと首を振りながら

立ち上がった。
「じゃあ僕、客を待たしてるからまたな！」
　ペチコートで重くなったドレスを揺らしながら、走って部屋を出て行く。ユアンも手元の資料をまとめ、立ち上がろうとするとギデオンが呼び止めた。
「すまん、しばらくここで仕事していてもいいか？」
「いいけど、どうして？」
「落ち着かないんだよ、人が居なくて」
「人が居るほうが仕事しやすいの？」
　ユアンは椅子に座り直した。
「始終賑やかだとそれはそれで困るんだけどな…」
「わかります」
　ザンが同意したので、ユアンは驚いた。
「そういえば二人ともたまに朝食のテーブルに残って仕事をしていることがあるよね」
　ザンの場合は、まず秘書に書類を音読してもらい、その後も会話で事務仕事を進めていくのだが、わざわざその秘書を朝食の部屋に呼んでまで居残っていることがある。
　同席したギデオンもそのやり取りを煩いと思う様子もなく、仕事に集中しているのだった。
「俺の場合ここに来る前は、まわりに人が居るのが当たり前だったからな…」

下町で運動家をしていたギデオンは、子供たちに勉強を教えながら演説の原稿を書いたり、酒場で皆と呑みながら何通も手紙を書いたりするのが当たり前の日常だったらしい。

「私は自分の周囲があまりにも静かだと、逆に遠くの音が気になってしまうのですよ」

ザンは興業で各都市を移動するのがつねで、劇団や楽団を伴（ともな）い旅をしていたし、街に着いてからも人々に囲まれているのが普通だった。その喧噪（けんそう）の中で詩も曲も次々と作り出していたのだ。

「ユアンから譲（ゆず）り受けた今の屋敷はとても静かで、そこで暮らすこと自体は快適なのですが、仕事の時は多少賑（にぎ）やかでもいいと思うときがあります」

「そっか…じゃあ好きにしてくれていいよ。俺もここで仕事できたらいいんだけど、今日は戻らないと…」

ユアンがそう言うと、

「たまに気が向いたときに付き合ってくれ」

とギデオンは手を振った。

会議部屋をあとにして、早足に執務室へ向かいながら、ユアンはうーんと首をひねった。

（休暇の代わり…狭い…暖かい…賑（にぎ）やか…？）

なにか思いつきそうなんだけどな、と呟くと隣を歩くロレンスが不思議そうな顔でユアンを見やった。

V

すごいなあ、とユアンはホールに持ち込まれたそれを見上げた。

こんなに大きなものは見たことがないし、こんだけ豪華なものは見たことがない。

「これを軍にわざわざ運ばせたのか？無駄すぎる」

メサイアが無感動に言い放った。

「無駄じゃねーし！」

タイタスが「ほら、ユアンだって感心してるじゃねぇか」とユアンの肩に手を回した。

「貴様がアホすぎて感心しているのだよ。こんな巨大なツリーをわざわざ自国領から運ばせるとは」

城の玄関ホールに運び込まれたツリーは、ゆうに城の四層にまで届くような大きさだ。のびのびと広がった樅（もみ）の枝のそこかしこに色とりどりの飾りが付けられていた。

「だってせっかくもらったもんを置いていけねえじゃん」

タイタスが唇を尖らせた。これはプレゼントだったの

かとユアンが目を丸くすると、タイタスは満面に笑みを浮かべ、うんうんと頷（うなず）いた。

「俺さまにはファンが多いからな！」

「ファンか敵しかいないのか、貴様には」

メサイアが毒づいたのも無理はない。

タイタスが自国へ戻っていたのは混乱を収めるためだ。ルーメン領は現在、体制の支持派と反支持派に真っ二つに分かれており、政治的な小競（こぜ）り合（あ）いを繰り返している。反支持派はタイタスに批判的だが支持派は本当に熱烈にタイタスを応援しているのだった。

「だけどこれはユアンへのプレゼントでもあるんだぜ」

タイタスの言葉にユアンは驚いた。

「俺さまがこれを皇帝陛下へのプレゼントに持ち帰ると言ったら、さらにたくさんの奴らが飾りを持ってきてこんなになっちまったんだ」

よく見ると、ツリーの飾りは一つ一つ別の形をしていた。つり下げられた星や動物はそれぞれがつたない手作りで、タイタスによく似ている人形やユアンに似ている人形もある。

「あの青い毛糸で作ってあるのはロレンスかな」

青い髪の騎士の人形をユアンが指すと、脇に控（ひか）えていたロレンスも樅（もみ）を見上げた。

「ユアンが喜んでいるならこれを城に入れること自体はかまわないが、ここに置くのは困る」
　ロレンスがそう言うと、タイタスは今度は彼の肩に馴れ馴れしく手を回した。
「この高さじゃ他の場所に入んねーんだよ。別にかまわないだろ?ジャマになるもんでもないし」
「思いきり邪魔なのだが。ここを塞がれては、来客を待たせる場所がない。そのうえ警備にも死角ができる」
「うーん…だったらロレンスの言うとおり、このままここへ置いておくわけにはいかないかなあ」
　タイタスのブーイングが聞こえたが、ユアンはそれを聞かなかったことにした。
「いったいどこへ持って行こうってんだ?アテはあるのかよ?」
　荷車を何台か連ね、巨大なツリーを馬たちに引かせながら、森の中の小道を進んでいく。そのうちの一台に仁王立ちになってタイタスが怒鳴った。
　皇城から約小一時間。皇帝領の森の中はときおり人の手が入っているとはいえ、完全に整備が行き届いているわけではないようだった。たまに馬たちが立ち往生して隊列の進みは遅かった。
　ユアンは騎士数人と共に行列を先導していた。いつもは隣に居るであろうロレンスを同行させなかったのは、今はまだこの先にある目的地を知られたくないからだった。
「そういえば、タイタスはいつもどんなふうに新年を迎えていたの」
「そりゃみんなでぶっ倒れるまで騒いでさ」
　そう言ったタイタスの顔は笑っていたが、どこか少し寂しそうだった。去年まで寝起きを共にしていた仲間たちが今年は居ないのだ。
「俺たちには明日どうなるとか、そんなことはいっさい関係ないからな。だから無茶ばかりだった」
　タイタスが無茶というならよほど無茶な暮らしだったのだろう。その盗賊団の仲間たちは今、ルーメン領の牢獄に居る。恩赦の申し出も空しく、だれ一人として自由の身になっていないのだった。
「領内を治めるのを信頼できる仲間に手伝ってもらえとメサイアの奴に言われてるんだけどな。まあそんなことは関係なく、このままだと俺さまが我慢できないからさ」
　けどまだ解放にはしばらくは時間がかかりそうだな、とタイタスは呟いた。遠く離れた土地には恩赦の意向も届かない。それは自分の力が足りないせいだとユアンはすまなく思った。

「ほらこの先だよ、タイタス」
　自分がみんなにしてあげられることなどたかが知れている。近付いてきた贈り物を見上げながら、これが今の自分の精一杯なのだとユアンは思った。

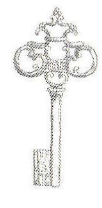
VI

「馬を使えば半刻もかからなかったな」
とギデオンが馬から降りながら言った。
「これ、建ってから何世紀経ってんだ?」
　感心するようにオーガストが言う。
「そんなに古めかしい代物なのですか」
ザンが首を傾げた。その手を掴んで、ユアンは皆を門の中へ促した。
「古いけど、手入れはけっこう行き届いてるんだ」
　すっかり寒さを忘れたかのようにオーガストが雪の中に突っ立ったまま、館を見上げる。
「そりゃいちおう皇帝の持ち物だからなー。荒れたまま放っておくわけにもいかなかったんだろうな」
　皇城の庭に建つ小さなマナーハウス。最初に造られてから一世紀半は経っているという。ユアンからちょうど五代前の皇帝が、故郷の館を模倣して造らせたものらしく、様式自体は建てられた時期よりさらに古めかしかった。昨晩降った雪が屋根にこんもりと積もり、まるで御伽話に登場する森の中の一軒家という感じだ。
「ほかの奴らは来てないのか?」
　入ってすぐのホールは、こじんまりと暖かみのある空間で、二階へ続く階段の木製の手摺りには、林檎や野鳥が素朴な意匠で彫られている。
　それを楽しげに指でなぞりながらギデオンが辺りを見回した。
「メサイアは用事が片付いたら来るって。ロレンスとタイタスはもう来てるよ」
　答えながらユアンが居間に入っていくと、ちょうどオーガストが歓声を上げたところだった。
「なんだこりゃ、めちゃくちゃ狭いぞ!」
「これでも俺と兄ちゃんの住んでいた家の居間が八つは入るよ…それに城に居るより暖かい」
　壁一面に大きな暖炉があって、そこまで燃えさかっているわけでもないのに、もうすっかり部屋が暖まっている。
「あの寒々しい執務室に比べたら天国だよ!よし、資料と睨めっこするならこの居間だな。夜もここに泊まったっていい」

「だったら俺もここに泊まろうかな。毎晩ソファで寝ていたら危うく風邪を引きかけたし」
こういうのが隣でわあわあ言ってたら仕事も捗りそうだしな、とギデオンはオーガストを指した。
「それにピアノだってあるんだよ」
ユアンがピアノの場所までザンを導くと、彼は心底嬉しそうに鍵盤の蓋を撫でた。
「ユアンが用意してくれたのですか？」
「本当はここの倉庫部屋に置いてあったんだけど、居間まで移動してもらったんだ。調律も済んでるからね」
「ではみなの邪魔にならないときに」
「僕なら一日中でも歓迎するよ」
とオーガストが言った。タイタスほどアピールは激しくないが、彼ももともとザンの大ファンなのだ。
居間の掃き出し窓を開けて、古い石造りのテラスに出たギデオンが驚いて声をあげた。
「なにやってんだ、そんなところで」
テラスの先に石垣に囲まれた庭があって、脇にタイタスの巨大ツリーが固定されている。ツリーの飾りは外されて、代わりに無数のランプが取り付けられていた。
最後のひとつを飾り付け終わって、タイタスが雪の上に飛び降りる。

「なにってツリーを派手にしてやってるんだぜ」
「城には置けなかったけど、このツリーはなるべく見える所に置きたかったんだ。…これは俺たちにも応援してくれてる人がいるって証だから」
ツリーの飾りひとつひとつもそうだ。雪に埋もれてしまうのが忍びなかったので、ユアンはそれをすべて回収して屋敷中のそこかしこに置いた
「俺にはみんなの望んでいるものはまだわからないけど、いつかゆっくり話してもらえたらいいなあって思うんだ。だからいつでも好きなときにここに来て、いっしょに過ごして欲しい」
「それはいい考えですね、ユアン。私はもうこれだけで充分ですが」
ザンがテラスから微笑を返した。
「仕事を持ち込んでも快適にやれそうだ」
とギデオン。
「それに暖かい！」
庭先に出てきたオーガストは、また雪の中に居ることなど忘れているようで、巨大なツリーを楽しげに見つめた。
日が傾いて、ツリーにも影が落ち、無数のランプが徐々に輝き出す。
ユアンは館を見上げた。二階の一角に灯りがともっている。あそこにはロレンスがいて、いま特別な時間を過ごしているはずだ。みんなで過ごす初めてのクリスマスは、たぶん仕事漬けでお祝いどころじゃない。それでもここならきっと、それすら楽しい思い出になる。
ユアンはそう確信した。

Ⅶ



ぎしり、と音がして二階からロレンスが降りてくるのが見えた。
毛布を抱えてホールを行き過ぎるところだったユアンは、慌てて階段の下へとって返した。
「ユアン」
向かい合うと、それ以上はなにも言えないという様子で言葉を探しながら、ロレンスはユアンに一本の鍵を差し出した。
「それは…返さなくていいよ。ロレンスに持っていて欲しいんだ。あの部屋はロレンスだけが開ければ、それでいいと思う」
ユアンがそう言うと、ロレンスは頷いて胸のポケット

に丁寧にそれをしまい込んだ。

この館がきちんと手入れされていたのは理由がある。暗殺された前皇帝のエルバートも、つい最近までここをプライベートな時を過ごす空間として使っていたのだ。

城での執務室や個室を受け継いだユアンがはじめに驚いたのは、彼がほとんど私物など持っていなかったということだった。

ただこの館の二階の角部屋にだけ、彼の生前を思わせる品の数々が残っていて、ユアンはそれを見つけたとき、すぐに扉を閉めた。

なぜかそれを最初に見るべきなのは自分ではない気がしたからだ。

「たまに会う機会はあったんだが、俺はほとんどあの人のことは知らない」

ロレンスがぽつりと言った。暗くなったホールには底冷えのする寒さが忍び寄っていたが、ユアンはそんなことは気にならなかった。

「どういう人かは…結局遺品を見てもあまりわからなかったな」

「そっか…」

「俺の家族は、オウラードにいるアクロイド家の父母とフエイなんだと思う」

ユアンは黙って頷いた。ロレンスがここまで自分のことを話すのは珍しかった。

「だが…今年は休暇に帰らないという状況になって、俺は初めて気がついたんだ。俺は…そのことを家族であるために必要なことだと思い込んでいたなと」

「家族であるために…」

そのこと自体はあながち間違いではないのかもしれない。家族であり続けることにも、たぶん努力が必要な時があるからだ。

だけど、たぶん…ロレンスは自分が養父母に気を遣っているという事実に今まで気がつかないまま、ひたすら努力を続けていたのだろうとユアンは思った。

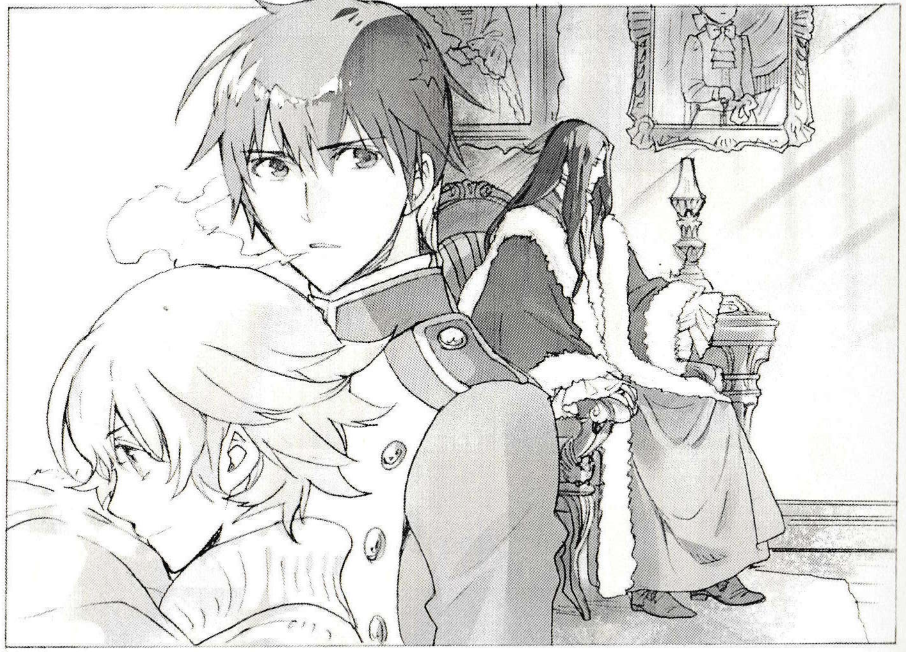
「ユアンに家に帰りたいの？と聞かれて、それよりここに居たいと考えている俺自身に気がついて、正直戸惑った」

今は家族より優先すべきものが、ここにある。

それは努力してきたロレンスにとってはある意味、養父母と自分自身を裏切ることにもなるのだった。

「なんか悪いこと聞いちゃったな」

そういうと、ロレンスは首を振った。



「ユアンと居ると、ひとつひとつ目の前が開けるようだ」

そう言われてユアンは困惑した。ユアンが不躾なのは、彼の事情も気持ちも気付けないでいたからだ。

「そんなんでいいのかな俺」

「なにが悪いのか俺にはわからないが…」

ひとつ、これだけは報告しておかなければとロレンスは言った。

「あの部屋に肖像画がふたつあった。ひとつは俺の五才ぐらいの時のもので、これはなんとなく記憶にある。養父母がわざわざソレムから画家を呼び寄せて描かせたものだ」

もしかしてエルバート帝が絵を送ってくれと頼んだ可能性もあるなとユアンは思ったが、口には出さなかった。

「もうひとつは…知らない女性のもので」

ロレンスは少し目を伏せた。

「たぶん俺の母親だろうとすぐに気がついた」

「ロレンスの…」

「実際は顔を見たことがないんだが、なぜかそうだとわかった。なぜだかはわからん」

「うん」

ユアンも母親の顔を覚えていない。だが見ればきっとそうだとわかる気がした。

「俺、来年こそはちゃんと兄ちゃんに会わないと」

本当の兄弟ではないと知らされてから、一度も顔を合わせていない故郷の兄。

「それがいい」

ロレンスは頷いて、そろそろ居間に行こうとユアンを促した。暗いホールを去る間際、「ありがとう」と囁くのが聞こえ、ユアンの胸の底にじわりと温かいものが広がっていった。

Ⅷ

居間に持ち込んだ毛布にくるまって、ユアンは窓の外を見た。

庭に飾られたツリーの光が雪に跳ね返って、居間の中をほんのりと照らしている。ソファではオーガストとザンが静かに寝息を立てていた。

「あいつ遅いな」

横に立ったタイタスが、庭の向こうに目をこらしている。

「城なら逆の方向だぞ」

と床で過去の帳簿を広げていたギデオンが、玄関ホールの方向を指した。

「そもそもこの暗闇で道がわかると思えないが」

ロレンスが騎士団の報告書の束から顔を上げる。

「迎えにいったほうがいいかな？」

とユアンが問うと、起きていた三人はいっせいに首を横に振った。

「お前が迷子になったら、どうすんだよ？そしたら俺さまがお前を探しに行くだろ？で、その次に行方知れずになった俺さまを追ってロレンスが出て行くだろ？」

「いっておくが、お前のあとを追ったりはしない」

ロレンスのひと言を無視してタイタスは続けた。

「で、そのあとは、ギデオン、ザン、オーガスト…気がついたら“だれもいなくなった”みたいになっちまうじゃねーかよ！」

「だからって放っておくわけにもいかないよ」

ユアンは毛布を取った。夜はどんどん更けていくし、ちらほらと雪は降り出してくるし、とにかくいてもたってもいられない。

「いいからじっとしとけ」

ギデオンが床から半身を起こした。ユアンに続こうと立ち上がりかけたロレンスを牽制するように言う。

「お前らを真冬の夜の森に野放しにしたら、残った俺たちがメサイアに殺される」

「まあ、あいつなら心配することはねえよ」

タイタスが掃き出し窓を開ける。

「それより雪がひどくなったら、もうこの景色はみられねえぞ？今のうちに堪能しとけよ。奴ならそのうちに絶対来るから」

庭に点った灯りを指して言う。しぶしぶユアンも頷いて、居間でただ待つよりはと外へ出た。その様子に安心したのか、ギデオンとロレンスも仕事に戻る。

テラスに立ったユアンとタイタスは白い息を吐いて、暗い空を見上げた。次から次へと雪が舞い降りてくる。

「なんでメサイアが無事に来るってわかるんだよ」

「城からちょっといった森の中で凍り死にするとか、あいつがそんな無様なミス犯すわけねーだろ」

「俺もそう思うけど、メサイアだっていちおう人間なんだから」

「いや…たまに人間じゃねえと思うこともある」

「うわ…正直いうと俺もあるよ…なんなんだろうメサイアって…と思うことが」

「人間以外の何だというのです」

いきなり前方から声が響いたので、二人は飛び上がった。

雪が降りしきる中、黒いコートの姿がぽつんと庭先に立っている。呆れはてたようにこちらを見ながら、メサイアは肩に積もった雪を払いのけた。

「人の噂をするなら、もう少し声をひそめたらどうなんですか…」

「貴様ああ！いつの間に！」

「すみません、道が分からず、少し遅くなってしまいました」

「無事に辿り着いてくれてよかったよ！」

「遠くからでも、これが見えましたので」

メサイアがタイタスのツリーを見上げた。

「ここまで派手に飾り付けたら、いやでも目に入ってくる」

「なんだ、俺さまのおかげで生きてたどり着いたのか」

とタイタスがニヤニヤした。それには答えずメサイアは地面を指した。

「そうして近くまでやって来たら別の光が見え…」

地面にぽつぽつと盛り上がった小さなかまくらを示す。さっき陽が落ちる前に、ユアンが作って並べたものだ。降り出した雪になかば埋もれかけてはいるが、中に灯されたロウソクの光が、揺らめきながら地面を照らしている。ユアンの作り出した光の道はテラスからまっすぐに森の奥へと続いていた。

「光を辿って歩いていたら、いつのまにかここへ来ていたのです」

「そっか…でもそれじゃ反対だ。俺は部屋の中からメサイアにそれを見て欲しかったのに…」
「反対というわけでも」
とメサイアは帽子を取った。
「夢の光を追ったら、ここへ辿り着いたのですから」
やはりここが夢の居る場所なのでしょう、とメサイアは微笑みを浮かべたのだった。

千年迷宮の贈り物　終わり

千年迷宮の七王子番外SS

OnYourSide

登場人物

◆

ジュリアス・エイリー：前七侯、元パルヴァ領主。オーガスト・モーガンを皇帝候補に推薦した。

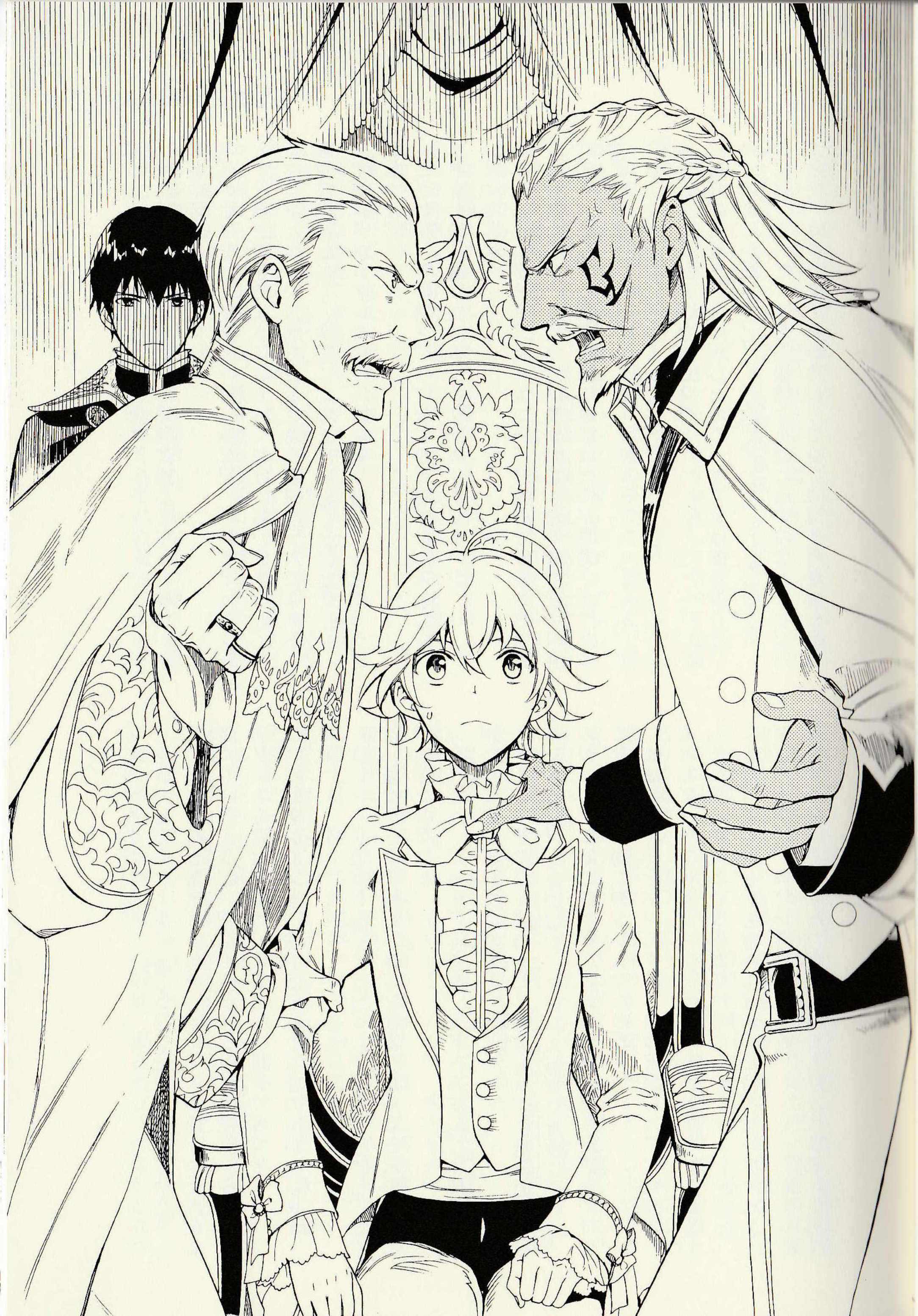
アドニス・リーガン：前七侯、元オウラード領主、現騎士団長ロレンス・アクロイドは妹の養子である。
ロレンスの実の父であるエルバートの親友。

エルバート・キャメロン：前皇帝。堅実な人柄だったが過激派《血統復古党》に毒殺される。
息子のロレンスを世間から隠し、アクロイド家に養子に出す。

ロンギヌス・デュベリー：元七侯でありながら、裏の顔は《血統復古党》党首だった。
皇帝エルバートを暗殺した罪で投獄される。

ヒルダ・チェンバレン：元七侯の紅一点。ザン・オーデュポンのファンで皇帝候補に推薦。

メルヴィン・バーチ、オピテル・ネイピア：前七侯



自分は本当にまだまだみんなのことをわかっていない。

そう思うのはこれで何度目だろうか。

今回ユアンが改めてそう気が付いたのは、想像もしていなかった人々が目の前で言い争いを始めたからだった。

そこは小さな室内楽用のホールで、両者の応酬は否が応にも辺りに響き渡った。幸いホールの中に居たのは勝手知ったる仲間のみで、帝国の重要人物たちによる内輪揉めをわざわざ外に漏らすような者はそこにはいなかったが、両者に挟まれたユアンはただ驚いて目を丸くしていた。

「貴様はまだ義理の甥っ子を贔屓の引き倒しにするつもりなのか！」

ユアンの左隣で怒鳴っているのは、前七侯、元パルヴァ領主のジュリアス・エイリーだ。

濃い色の肌を持つ、どことなく鋭い容貌をした初老の男である。きれいに撫でつけた髪と顎髭は年齢を重ねるうちに色が失われ、今では真っ白になっていたが、希代の色男と謳われた彼の外見を少しも損なっていなかった。

「私はただ、適材適所ということを考えているだけだ！」

反対方向から怒鳴り返したのはこちらも前七侯、元オウラード領主のアドニス・リーガンである。

彼はいかにも北の国の貴族といった容貌で、薄い色の髪、口髭と白い肌、そして端正な顔立ちの持ち主だった。たしかジュリアスよりは九つほど若かったが、今となっては両者の間に年齢の違いはさほど感じられなかった。

というのも前皇帝の暗殺があって以来、皇帝の長年の友であり信奉者でもあったアドニスは気落ちのあまりすっかり生気を失っていたからだ。彼はオウラード領内の自らの屋敷に引きこもり、つい最近まで人々の前に姿を現さなかった。だから旧知である前七侯の二人が直接顔を合わせるのは、おそらく半年も前、ユアンの即位披露の宴以来となるはずだった。

「いや、原則を曲げてまで甥を七侯に戻そうというのは明らかに無理があるぞ。どう思われるか陛下？」

いきなり話の矛先がこちらを向いたのに驚いて、ユアンは大きな椅子の上で体を緊張させた。左からはジュリアスに肩を掴まれ、右からはアドニスに腕を掴まれて、すっかり身動きのしようがない。

「ロ…ロレンスのことなら、俺も戴冠前に七侯に就任するように頼んだんですけど、はっきりと断られたんです」

しどろもどろに返答すると、それ見たことかというよう

にジュリアスは片眉を吊り上げた。
「甥のほうが貴様よりよほど道理に通じておるではないか、アドニス」
「だが他に有力な候補もいないのだぞ。いつまでもオウラードを領主不在のままにしておくわけにもいくまいし、そこへくるとロレンスはもともと皇帝候補の一人ではあるし、領内の評判も高く、就任に文句を言う輩もおるまい」
アドニスはユアンのほうへ身を乗り出し、一気にそう言い放った。
「どうかな、皇帝陛下。今いちど我が甥ロレンス・アクロイドを七侯に取り立てるつもりはありますまいか」
「えっと…あの…」
「なりませんぞ陛下。我々はついぞ最近まで知らされておりませなんだが、こやつめの義理の甥は先の皇帝陛下の実の息子。そもそも皇帝候補に選ばれたのが間違いだったのですからな」
ユアンが返答に困って俯きかけた時だった。
「そこまでにして頂きましょうか」
自分の真後ろから声がしたので、ユアンは振り返った。
いつのまにか渦中のロレンスが少しむっとした顔でそこに立っていた。彼が不機嫌さを顔に出すのはあまりないことで、ユアンはそれが珍しくて少しの間その表情を眺めてしまったのだった。
今日のためにホールに設えられた皇帝の椅子は大きく、背もたれも立派だったが、ロレンスの長身はそれを上回っていたようだ。彼は並べられた座席の背後から伯父のアドニスを見おろすと、やや冷たい調子で言った。
「いいですか伯父上、陛下はそろそろ次の用がありますので」
ロレンスが退室を促したので、元七侯たちはしぶしぶ若い皇帝から手を離し、ユアンはようやく立ち上がることができたのだった。
「それでは、ジュリアスさん、アドニスさん。今日はありがとうございました」
一礼してその場を離れると、間髪入れずに重みのあるマントの翻る音がして、ロレンスがすぐ背後に続いたのがユアンには分かった。これ以上伯父たちが声をかけてこないように間に割って入ったのだ。
彼はいつもそうやってすべての障害からユアンを護ろうとしてくれている。
「それがいかんというのだ!」
我慢の限界だとでも言わんばかりにいきなりアドニスが立ち上がり、ロレンスを指さした。
「皇帝エルバートのたった一人の血を分けた息子ともあろ

う者が！それではまるで…」
アドニスのやつれた顔が怒りで紅潮した。
「ただの『ユアン・ジュノー専属護衛係』ではないか！」

「ほんとうにあの連中ときたら…どうか許してやってね皇帝陛下」
ユアンたちがホールから続く庭園のテラスへ出ると、日陰のテーブルでお茶を飲んでいたヒルダ・チェンバレンがまっ先に謝ってきた。彼女は前七侯の紅一点で元オクト=ノクテ領主、先ほどまでおこなわれていたリサイタルの主催者である。
年の頃はアドニスとそうは変わらないが、表情のほうはその元同僚よりずっと瑞々しかった。彼女のあとを継いだ現オクト領主のザン・オーデュポンが微笑みを浮かべ、すぐ横に座っているせいかもしれない。
真っ白な衣装に身を包み、テラスの日向と日陰の狭間に佇んでいるザンは、今日はまたいつにもましてこの世のものでないように美しかった。ヒルダはザンが大歌手だった頃からの大ファンで、彼を皇帝候補に推薦したのも彼女自身だという噂だった。
今日ユアンたちが訪れたこの屋敷も、ヒルダの持つ別邸のひとつである。七侯や大貴族はそれぞれの領内に本宅をかまえているが、政務や社交目的で首都ソレムに別宅を置いていることが多かった。ソレムの皇城に近い南西の丘陵はとくにそれらの別邸が建ち並んでいることで有名だ。
ヒルダ・チェンバレンは前皇帝の崩御に従い七侯を退いて以来、地元オクト=ノクテ領の自身の館で夫や家族とともに穏やかに過ごしていた。だが先日ユアンたちにとある問題が持ち上がり、彼女の手を借りたいと申し出たときに、その解決のためにわざわざソレムまで足を運んでくれたのだった。ジュリアスとアドニスも同様である。
今日のこの小さな催しは、その慰労と新旧七侯の親睦を兼ねて、ヒルダ自身が開いたものだった。
催しのメインはザン・オーデュポンによる叙事詩の独唱会で、曲目は『亡国のシャハル』。現七侯ルーメン領主のタイタス・ラムの出生から半生を描いた英雄譚である。新皇帝ユアンと歌い手のザン、それにタイタス本人を含めた現七侯、騎士団長のロレンスも先ほどまで揃って、いまでは海の向こうにまで広く知られつつあるその歌に聴き惚れていたところだった。
ユアンの両隣に陣取った二人の元七侯が言い争いを始めたのは、その余韻も消えきらぬうちのことである。

言い争いの火種となったのは、現在空きっぱなしとなっ

ている七侯の席に、誰を座らせたらいいかという問題だった。

　去年選び出された皇帝候補者のうち、ロレンス・アクロイドがその椅子を辞退したこと、そして皇帝選出の混乱の際にオセロ・ブラックモアが命を落としていたのもあり、現在は七侯の座はそのうち二つが空席のままとなっていた。

　このマグナ・エンデトリアで皇帝に次ぐ地位にある《七侯》とはすなわち帝国七国の領主になることを意味する。そのうち北方のオウラード領とユアンの住んでいた辺境のマーレ島の二国が領主不在のまま、もう半年以上になろうというところだった。

　ロレンスの義理の伯父であるアドニスはなんとしてでもお気に入りの甥を彼らの故郷であるオウラードの国王に就けたがっていたし、ジュリアスは原則を盾にそれに反対していた。

　原則というのは具体的には『皇帝、七侯候補には現職の子息女、伴侶が推薦されることを禁じる』という帝国憲章に書かれた一節を指す。この一節は皇帝、及び七侯の世襲を禁じたもので、ロレンス自身がその原則を守って自ら身を引くことを決めたのだった。

　ユアンとしてはロレンスにオウラード侯を務めてもらえればそれより心強いことはなかったが、彼自身が断るものを無理に引き止めることはできなかった。その代わりにロレンスは正式な騎士として皇帝の騎士団に入団することを強く望んでいたので、ユアンは即位するなり彼の希望を叶えたのだった。そうして七侯には及ばないが、騎士団の長という帝国の伝統ある重要職に彼を推薦し、それが騎士団にも受け入れられたのである。

「しかし元七侯の強い薦めをむげにするわけにもいかんだろ」

　チェンバレン邸からの帰りの馬車の中で、相変わらず書類を広げながらギデオンが言った。タイタスとロレンスが自分の馬に乗って帰るというので、皇帝専用の大型馬車にはギデオンとオーガストとメサイアが乗り合わせていた。ザンはヒルダとの夕食の約束があり、あとから城へ戻ることになっている。

「それはやっぱりロレンスをオウラード侯にってこと？」

　ユアンは眉をしかめた。ユアン自身にとってはありがたいことだが、ロレンス本人が嫌がる役目を押しつけることはあまりしたくなかったのだ。

「そりゃロレンスはお前がどうしてもというならそうするかもしれないけど」

とオーガスト。今日はザンの白い衣装を引き立てるような、淡い菫色のドレスに身を包んでいる。同じく淡い色のレースに包まれた手を振って「そうじゃない」と言った。

「実のところ、帝国憲章には直接世襲を禁じた記述は無いのですよ」

　とメサイアが言うのでユアンは驚いた。メサイアも今日は菫色のコートやタイを身に付けていて、オーガストと並んで座る姿はまるで一対の絵のように見える。ユアンやギデオンが色味のないグレーを選んで着ているのとは対照的だった。

「記述は直接無くても、結局は世襲を禁じるための法なんだよね？」

「法律っていうのは作られた意図じゃなく記述に忠実なものなんだよ」

　現在法相を務めるオーガストが言った。

　そういえばここに居る三人はみな法律に詳しく、不得意なのは自分だけだなとユアンは気がついた。メサイアは犯罪者を追っていただけあってとくに刑法に詳しいし、オーガストは商売上必要だったのか、さまざまな七領の法の違いまで心得ている。そしてギデオンといえば学生の頃から法律を中心に学んできた専門家だった。

　三人は皇帝領に戻るまでの道中、ひとしきり法律に関しての論戦を闘わせていたが、ユアンの知識ではそれをなんとか理解するだけでも精一杯だった。

　彼らが問題にしているのは憲章の一節の中の一文で、つまり『子息女、伴侶』という記述が『籍』によるものなのか、『血』によるものなのかどちらで判断されるのかという一点だった。ロレンスはアクロイド家に養子に出されていたので、戸籍上は前皇帝の息子ではない。親子関係の有無が『籍』によって判断されるなら、七侯の地位に就く資格があるということになる。

「もちろんこの法の根本はイグニス時代から続く世襲による腐敗を避けるためのものなので、本来はどちらの意味も含んでのことです」

　とメサイアがユアンに向き直って言った。

「ただアクロイド家に養子に出されたロレンスが、皇帝候補に選ばれたことは厳密に言えば違法ではありません」

「そうなんだね…」

「だから議会で皇帝候補としての承認が下りたんだな」

　ギデオンが書類を脇に押しやり、顎髭を触りながら唸った。ここでいう議会とは枢密院のことを指す。各七侯が推薦した皇帝候補はそのまま認められるわけではなく、枢密院会議で皇帝と全七侯に承認されなければならないのだ。

「あぁは言ってるがぶっちゃけジュリアスもロレンスがエルバート陛下の隠し子だってのは知ってたと思うぞ」

とオーガスト。

「そう…なの？」

「違法ではないわけだし、表向きは陛下の実子であることは伏せられていましたから。皆あえて反対はしなかったのでしょう。しかし陛下の暗殺があり、その事件のあらましと共にロレンスの身元は帝国全土に知れ渡ってしまった」

メサイアの説明にギデオンが頷いた。

「そうなると世論的にもロレンスが辞退したことは正しい選択だという意見が優勢になるな」

「ジュリアスさんの言うことももっともだし、アドニスさんの言うことも間違いではないんだね」

そうです、とメサイアが手袋に覆われた手のひらを仰向けながら言った。

「しかし…二人がどう言おうが、ロレンスが辞退を選ぶのは変わらないでしょう」

ユアンは頷いた。

たぶんロレンスならそうだろう。

「だが申し出を退けるにしてもだ、アドニス・リーガン卿は俺たちの大先輩でもあるわけだし、なにか納得できる提示を考えていたほうがいいだろうな」

ギデオンが言うと、やれやれとオーガストが首を振った。

「つまり元七侯を粗末に扱うわけにもいかないんで言い訳を用意しなきゃいけないってことだよな。まあ、アドニスがしつこいのはしょうがないとしても、あの二人の意地の張り合いはそれだけじゃないんだけどな…」

「どういうこと？」

ジュリアスとアドニスの間にいったいなにがあるのとユアンが訊ねると、オーガストはしばらく黙ったあと、ふうと大きく息を吐き出した。

「これ、話しておいたほうがいいのかもな。本人がずっと知らないままってのも…」

「本人というのは？ロレンスのことですか？」

メサイアが目線だけちらりとオーガストに投げかける。

「あいつがいいっていえば、僕から皆に話そうか」

前七侯たちの間に過去なにがあったのかは知らないが、それがロレンスを傷付けるような話じゃないといいなと、ユアンは思った。

皇城の西側に広がる森を、半刻ほど馬で入ったところに古いマナーハウスがある。かつてエルバート帝が私的な時間を過ごした場所でもあり、今はユアンたちが仲間内

で過ごす憩いの場にもなっている。

皇城でさまざまな問題が起こったときには枢密院会議の場で話し合うのだが、記録を残す必要がないようなごく私的なことを話し合うときは、その居間やテラスが彼らの臨時の集会所となるのだった。

「いやいやだからまず話をきこうよ！ね！」

春とはいえ夜はまだまだ肌寒い。

マナーハウスの庭に面したテラスの窓を閉め切って、ユアンたちは暖炉に少し火を入れた。その前で悲鳴を上げているのはオーガストだ。可憐な少女と見紛う彼の華奢な腕を固め、淡々と背後から締め上げているロレンスを見ながら、ユアンはあれはなんの技だろう？と考えた。

「なぜ隠していた。いつでも話せばいいようなことを」

ぶっきらぼうにいいながらもロレンスは腕を緩めようとはしなかった。オーガストが自分に関することを隠していたのがよほど気に入らなかったらしい。

ロレンスは幼馴染みのオーガストにはつねに遠慮が無く、ユアンにとってはそれが少し羨ましい気がした。同時に故郷の島に居る幼馴染みたちのことを思い出す。

「いいなあ、あれ、あとで俺も教えて貰おう…」

「あれは《大陸》に伝わる古い体術のひとつですよ」

窓際でお茶を口にしながらメサイアが言った。《大陸》というのは帝国の南海、南西諸島の向こうに広がる巨大な大陸のことである。エンデトリアとは全く異なる文化や言語を持っており、武術もまた独特の伝統があるらしかった。

「メサイアもあれを使うの？」

「例の《教育機関》で幼い頃から叩き込まれたもののひとつです。ロレンスがぜひとも習得したいというもので、僕が教えたのですよ」

《教育機関》というのは過激派《血統復古党》の工作員養成機関のことだ。メサイアにとってはあまりいい思い出のない時代だっただろうが、そのとき得たスキルを無駄にしないところが彼らしい。そう考えていたらいつのまにかタイタスが側にやってきて、

「あれは絶対強えだろ！俺さまにも教えてくれ！」

と言った。いつものようにエールの入った瓶を抱えている。

「いいとも、あとで森に来るがいい。存分に落としてやろう」

「こいつ完全に俺さまを殺す気だわ…」

タイタスが身震いをする。メサイアがタイタスを絞め殺さないように願いながら、ユアンは呟いた。

「しかしロレンスはどこまで強くなるつもりなんだろ…」

剣だけじゃなく異国の体術まで習得したら、帝国どころか世界一の戦士になってしまうんじゃないだろうか。

「感心してないで誰か止めてくれよ！」

オーガストが息も絶え絶えになりながら叫んだ。

「もう離してあげなさい、オーガストが今にも壊れてしまいそうな軋み方をしていますよ」

とザンが微笑みながら言うと、ロレンスがようやくオーガストを離す。悪態をつきながら床に座り込んだオーガストだったが、一息入れると立ち上がってドレスから埃を払い、皆の顔を見渡した。

ザンは先ほどからピアノの前に座り、いたずらにいろんな曲の断片を弾いてみたり、その音を逆から弾いてみたりしていたが、オーガストが暖炉の前に立って咳払いをすると静かにピアノを閉じた。

ギデオンも書類から顔をあげ、長椅子に座り直す。

そうして皆が静まりかえると、暖炉の炎のパチパチと弾ける音がユアンの耳にも届いた。

オーガストは、ジュリアスとアドニスの間に生まれた諍いの始まりを話し始めた。それはロレンスが生まれる前の出来事だった。

ジュリアス・エイリーはパルヴァ＝ノーテ領でも一、二を争う旧家の出身である。彼は生まれた時から周囲の者たちにより、王子のような扱いを受けて育ったが、性格はまるで貴族的ではなかった。

恵まれているのにおっとりとかまえたところがなく、才気走った現実主義者であり、自分が一番だと信じて疑わなかった。傲慢で他者に厳しい一面は多くの者にとっては近寄り難かったが、女性からつねに人気があった。それは彼がイグニス時代より続くといわれる大貴族エイリー家の跡継ぎだからというのもあるし、精悍で無駄のない外見のおかげでもあるし、その傲慢さがある種の女性たちには色気を感じられるものだったからでもあった。

数多くの女性と浮名を流していた彼が、妹のように可愛がり、大切にしていたのが、七つほど年の離れたクラウディアという女性だった。

クラウディアは没落した貴族の娘で、家族ごとパルヴァ領へ流れてきたところを遠縁のエイリー家が保護していた。ゆえにジュリアスにとっては遠縁に当たるのだが、彼は本当の妹のように扱っていた。

しかし貴族とはいえ広大な荘園の隅に間借りしているだけの家族と、本家の跡継ぎであるジュリアスの接点は本来ならば無いはずだった。彼らが出会ったのは、ジュリアスがクラウディアの一家の住む農地へ逃げ込んだのがきっ

かけだと言われている。
　ジュリアスは少年時代から皇帝候補の筆頭として名を上げられていたが、それだけに敵も多かった。競争相手というだけではなく、刺客が差し向けられることもあったのである。
「ジュリアスがまだ十代の半ばだったころの話だけど、将来の皇帝候補に選ばれたかったライバル貴族の子息が刺客を送り込んできたというんだ。彼は自信家だったから供も付けずに出歩いていて、刺客にやられそうになった」
「ずいぶん無防備だったのですね…大変冷静な方に見えますが」
　ザンが感心するように言った。
「冷静なんだけど、たまに自信過剰過ぎて計算違いをやらかすんだよ、あの人。それで大けがをして、逃げ込んだ農家の納屋でクラウディアに出会ったそうだ」
　その時クラウディアはまだ十にもならない、幼い少女だった。少女は非力だったが、全力で見知らぬ少年ジュリアスを護り通した。小さな体で追っ手たちの前に立ちはだかったのである。それは勇気ある行動でもあるし、ただの無謀でもあった。
　しかしジュリアスは無償の親切というものがこの世に存在するということを、その時まで信じていなかったので、少女の無垢さにひたすら心打たれたのだという。結局この時は周囲の農家の者たちが駆けつけたために大事には至らなかったのだが、その時からクラウディアはジュリアスにとっては純真さと優しさのシンボルとなった。たった一度護られた経験が、生涯の忠誠心へと変わった瞬間だった。
　ジュリアスは多くの女にとっては野心溢れる恋人だったが、クラウディアに対しては実の兄のように、または唯一無二を護り通す騎士のように接した。大人になっても彼女を娶ることはしなかったが、彼女に異性が近付くことを断固として許さなかった。
　その中でクラウディアが出会ってしまった運命、それがのちの皇帝となるエルバート・キャメロンだったのである。
　皇帝候補として選ばれたとき、エルバートは士官学校を卒業したての年若い将校だった。アドニスは士官学校時代からの親友であり、二人は家柄や成績、帝王杯での実績を合わせ、それぞれソレム、オウラード各領からの推薦を受けて選出へと至った。
　各領の貴族は候補を持ち回りで選出していたために、彼らが選ばれるのは元から決まっていたようなもので、二人は初めは目立たない存在だとされていた。

　次期皇帝として有力視されていたのは、ジュリアスとヒルダ、そして才能を認められイスカ領最大の名家デュベリー家の養子に入ったロンギヌスの三人だった。エルバートはマーレ島貴族で年長のオピテルや、同じく持ち回りの結果選出されたメルヴィン・バーチなどと同様に、優秀ではあるが所詮は七侯止まりだと見られていたのである。
「ところが、フタを開けてみればこれが…エルバート・キャメロンはジュリアス以上の大物だったんだ。才気に溢れているのに誠実極まりなく、たちまち周囲の人物の心を掴んだ。アドニス・リーガンは元からエルバートが皇帝に選ばれると信じて疑わなかったし、ヒルダもほどなくしてエルバートを選ぶと宣言した」
「ジュリアスさんは、元々エルバート帝のライバルだったんだね」
　ユアンが感心しながらいうと、オーガストは笑みを浮かべた。
「面白いだろ？ロンギヌスとの一騎打ちのはずが、なぜか次々と皆エルバートの味方になっていったんだな。実際選出会議がどのように行われたかは知らないが、全員から好感度の高かったヒルダを味方につけたのは大きかったみたいだ。ジュリアスも当時ヒルダにメロメロだったらしいし。有能なようでどっか穴があるんだよなあ、あの爺は」
「ヒルダは当時からやり手だったのですね。ご一緒すると話題も尽きなくて楽しい方ですよ」
　ザンも微笑む。ヒルダとの夕食は楽しいものだったらしく、今夜の彼は始終上機嫌だった。
「…で最終的にはモーガン家がエルバート・キャメロンの後ろ盾についたんだが、これが決定打となった。残りの者たちも次々にエルバートを支持し、ジュリアスは地元の昔馴染みであり、当然味方になってくれると思い込んでいたモーガン家に梯子を外された形になった」
「今は仲がいいようじゃないか。少なくともその、今回は不親切なモーガン家のお嬢ちゃんを推薦するぐらいには」
　ギデオンが言うと、オーガストは首を振った。
「もちろん両家は冷えた関係になったけど、まあそれも一時のことだよ。もともとジュリアスは現実主義者だから、モーガン家と疎遠でいては仕事上立ちいかないこともわかっていたんだ。パルヴァ領の領主となった時に、それまでのこじれた感情を忘れることにして、あっさり和解を申し込んできたのさ」
「それで…その女性は、どこで父と出会ったんだ」
　それまで黙っていたロレンスが、じらされるのを耐えきれないように言った。彼が一番知りたいのは皇帝選出の過程より、断然そちらだろうというのはユアンにも想像でき

た。

「モーガン家主催のパーティだよ。各界の有名人や、当時の皇帝、七侯たち、エンデトリア中の有象無象魑魅魍魎を集めた前代未聞の大宴会だったらしい。皇帝候補たちも全員呼ばれていた。というか彼らがその場の主役だったんだ」

「エンデトリア中の有力者に、皇帝候補をお披露目するための場だったのですね」

ザンが言うと、はあ?とタイタスが首を傾げた。

「そんなことをなんでわざわざモーガン家がやるんだよ?皇帝候補を決めた皇帝や七侯とかがやればいいことだろ」

「うーん…僕はその時この世にまだいなかったから、これは推測だが」

オーガストは腕を組み、細い指先でとんとんと自分の頬を叩いた。

「たぶん無名のエルバートを世に認めさせるために、モーガン家が開いたんだと思う」

「そこまで無名だったのかよエルバートくんは!」

とタイタスが言うと、メサイアが、

「というのもありますが、よほど入れ込んでいたのでしょう、モーガン家は」

と口を挟む。

「それでそのクラウディアっていう人も、そのパーティにきたの?」

ユアンが訊ねると、ロレンスもそれが知りたいというようにオーガストを見つめた。

彼は一見あまり様子が変わらないようでいて、じつは先ほどから少し落ち着きを失っていた。ロレンスは話が始まってからずっとオーガストのすぐ脇に立っていたのだが、よく見るとつま先の向きを変えたり、体重を左右に移す頻度がいつもより多いのだった。

「ジュリアスがパートナーとして会場に連れてきたという話だよ。だけど皇帝や七侯、居並ぶ貴族たちに恐縮したんだろう、そんな場に慣れていない彼女はすぐにどこかへ消えてしまった。同じく、主役のはずのエルバート・キャメロンももともと社交の場があまり好きじゃなかったらしくてね。彼もいつのまにか広間から消えていた。二人はその時に知り合ったのではないかと言われているんだが、パーティの間中は誰も二人の変化に気が付かなかったし、親しくしているところを目撃した者もいない」

「人が大勢溢れかえる中で、はみ出した者同士が出会ったのですね。お互いどこか人目のつかない場所にでも、逃げ込んでいたのでしょうか…」

ザンがどこか夢見るように呟いた。

「しかし…そんなに出会ってすぐに意気投合するものなのか」

ロレンスが釈然としないとでもいうように言った。父親とその人の間にもっとなにか、決定的で劇的な出会いがあったように想像していたのかもしれない。

「相手がそうだと出会ってすぐに気が付かなかったら、いつ気が付くんだ?」

と不思議そうにタイタスが言うと、

「なにもかも手っ取り早いタイタスらしい物言いですね」

ザンが笑みを漏らした。

「ともかく二人の間になにが起こったのかは誰も知らないのだから、それが一目惚れだったのか、その場で絆が生まれるような事件があったのかどうかは調べようがないということですね」

少し好奇心をそそられたようにメサイアが言った。

「少なくとも僕はなにも聞いてないな。ただパーティが終わって以来、クラウディアの様子が少しおかしくなって、ジュリアスが問い詰めたら…まあ、そういうことだったらしい。好きな人ができたと告げられたわけだな」

「それで…どうなったの」

ユアンはジュリアスの気持ちを思うとハラハラしてしまい、先が気になってどうしようもなくなった。ジュリアスは何よりもクラウディアを大切にしていたはずだ。

「もう一つの抗争が起こったんだよ」

にまっとオーガストが笑うと、たいして面白くもなさげにメサイアが「要するに三角関係ですね」と頷いた。それを聞いたザンは椅子の上で背筋を伸ばすと、ぎゅっと自分の両手を握り合わせた。

「エルバートとジュリアス、二人のカリスマが皇帝の座と同時に、ひとりの女性を争ったのですね…!」

「声が弾んでるよ、ザン」

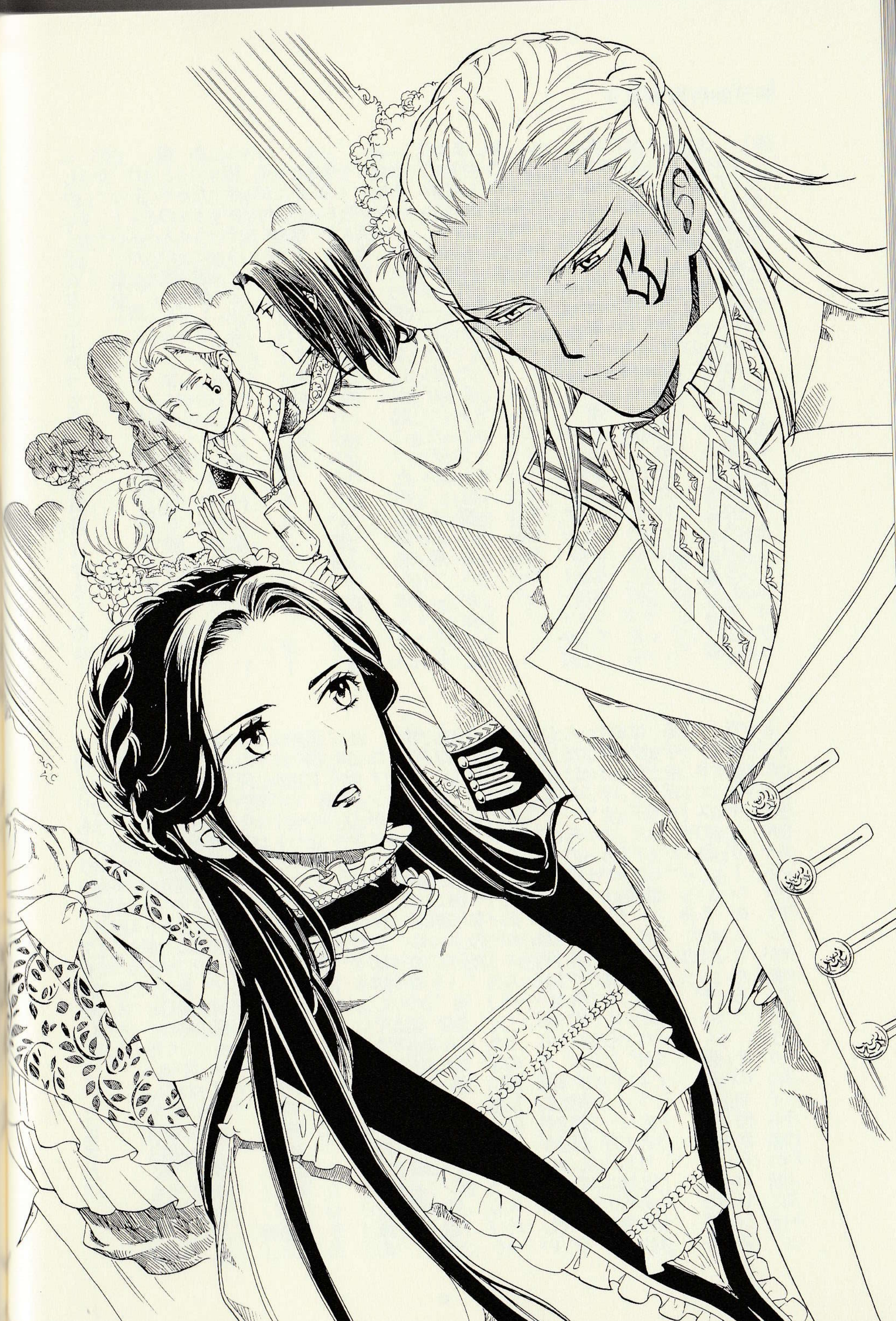
ユアンが言うと、ザンは嬉しそうに微笑んだ。彼の頭の中では、もうそのシーンが恋の鞘当てを描いた戯曲にでもなり始めているに違いない。なんといってもザンの得意分野は『ロマンス』なのだ。

「そこでがんばったのがエルバートの親友のアドニスだったんだよ。アドニスには当時からもう婚約者がいたらしいんだけど、その婚約者や妹や仲間たちを総動員して、クラウディアとエルバートを応援したらしい。一方ジュリアスはクラウディアの想いをあきらめさせようとありとあらゆる手を尽くした」

アドニスの妹というのはおそらく現在のロレンスの養母であるキャトリーンのことだろう。その当時からロレンスと、のちにキャトリーンが嫁いだアクロイド家の間には

浅からぬ縁があったのだという事実に、ユアンは内心驚いた。ロレンスはそのことを知っていたのだろうか？
「アドニスさんは相当がんばったんだね…」
とユアンが呟くと、またオーガストがクスクスと笑った。
「…そりゃもう。親友のためなら火も熱くないと言わんばかりのおっさんだからな。相当無茶をしたんだろう。ジュリアスは当のエルバートより、アドニスに怒りまくっていたらしいから」
「そうしてその確執が今に続くというわけですね」
とメサイア。
「やれやれ…そういう理由だったのか。ジュリアス様は今も、ライバルだったエルバート帝と自分を裏切ったクラウディアとの間に生まれたロレンスには複雑な思いがあるわけだな」
ようやく納得がいったというようにギデオンが頷いた。
「とくに自分の邪魔をしたアドニスがロレンスを贔屓しまくるのが、そりゃもう気に入らないわけさ」
話はこれで終わりだとでもいうように手を振り、オーガストは暖炉の側を離れた。そうしてサイドテーブルに置かれたお茶を飲み干すと、ふうと一息をついた。
「皇帝の座と大切な女性を奪われたあげくに、その敗北の象徴ともいうべきロレンスを皇帝候補に推薦して、また皇帝に押し上げようとしたのがあのアドニスだったってわけだよ」
「あーそんでまたアドニスの思うとおりに、まんまとロレンスが七侯とかになっちまったらそりゃ目障りでしょうがないよな」
同情したようにタイタスが言う。
いろんな人の応援や、時には邪魔があったけど…とユアンは考えた。
エルバート帝は最後には愛しい人を勝ち取ったんだな。
ちらりとロレンスを見ると、彼はなにか考え込むように、消えかけた暖炉の炎を見つめていた。青い瞳にちらちらと揺れる光が映り込んでいる。
もうこの世にはいない人々を想って揺れているのか、自身の立場をどうするか考えあぐねているのか。
ユアンにはその胸の内が、想像もつかなかった。

「ユアン…」
密やかにそう呼ぶ声がして、ユアンは目を覚ました。
いつの間にか居間の中は闇に包まれており、暖炉の火が消えて、あたりには寒々とした空気が漂っていた。
ユアンは自分の体に毛布が掛けられていることに気が付



いて、慌てて長椅子の上で身を起こした。

「ここでそのまま眠ったら、風邪を引いてしまう」

長椅子の足元にロレンスが膝をついており、ユアンを見上げていた。暗がりでその表情はよくは見えなかったが、声色は相変わらず優しく穏やかだった。

周囲には自分たちの他には誰も居らず、ユアンはもしかして彼が傍らでずっと見守っていてくれたのかと思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ごめん…俺…。みんなはもう部屋に引き上げたのかな…？」

「メサイアは用事が残っているからと城に戻っていった。ギデオンとオーガストはダイニングでまだ仕事をしているはずだ。ザンは屋敷から迎えが来たので帰った。タイタスは…どこにいるのかよくわからん」

タイタスは皇城内に私室を持っていたし、皇城に隣接するソレムの街に屋敷も持っている。このマナーハウスにも彼のための部屋があるはずなのだが、ひとたびどこかへ姿をくらますと正確な行方を知ることは難しかった。城内の納屋に潜り込んだり、どこか無人の部屋を勝手にねぐらにしていたり、野営をしていたのか、煤だらけになって何日か戻らないこともある。そのあたりはもとの盗賊の暮らしが、いまだに抜けきれていないようであった。

「タイタスはいつも気ままでいいなあ。…俺は城に戻ろうかな。リイプをおいてきちゃったし」

「それなら城まで馬で送るが…」

ロレンスが口ごもったので、ユアンは首を傾げた。

「なにか都合悪かった？」

「いや…」

そう言ったきり、しばらく逡巡するように顔を逸らせていたロレンスだが、ふと決意したようにユアンに向き直った。

「もしユアンが大丈夫なら、これから少し付き合って欲しい場所がある」

こんな夜中に？と思ったが、ユアンは口に出さなかった。ロレンスが自分からなにかを言い出すのはめったにないことなので、ユアンとしては彼の望みにできるだけ応じたかったのだ。

居間のテーブルに置かれた蝋燭に火を灯して、ロレンスはそのままついてくるよう身振りで示した。ユアンが頷くと、彼はそのまま居間から北側の扉を開け、吹き抜けのある屋敷の玄関ホールへと出て行った。

玄関ホールから続く階段を上りきると、西側には普段ユアンが使っている客室や書庫が並んでいる。東側の突き当たりには、鍵のかかった特別な部屋があった。そこは生前、

エルバート皇帝が私的に使っていた書斎で、ユアンは去年のクリスマスにロレンスに鍵を渡しておいたのだった。ロレンスはそこまで歩いて行くと、胸元から鍵を取り出し静かに扉を開いた。

黙ったまま部屋に入り、ロレンスは中にあるランプに灯りを移した。前皇帝がひとりきりで過ごしていた空間が、オレンジの光に柔らかく浮かび上がる。

「入っていいの」

ユアンが訊ねるとロレンスは頷いた。初めてユアンがこの部屋を発見した当時はあまりちゃんと見ていなかったのだが、あらためて中を見ると、そこは皇帝の私室にしては素朴な作りだった。華美な家具もなく、美術品も並んでいない。作り付けの書架に何冊もの法律書や古い歴史書が並べておいてあり、部屋の中央には木製のどっしりした机が置いてあるきりだ。

亡くなったエルバート帝はこんなプライベートな空間でも熱心に勉強をしていたんだ、とユアンは気が付き、あらためて背筋が伸びる思いがした。

「前に話しただろう、父の部屋に絵が二つあったと」

ロレンスが言って、壁の一面を指さした。

ユアンが振り向くと、この屋敷が建てられた頃のものだろう、大理石の古びたマントルピースがあり、その上に二枚の肖像画が飾られていた。

そのうち一枚には、まだ幼い少年が描かれてあった。五歳頃の自分の絵があったと以前にロレンスが話していたのをユアンは思い出した。絵の中のロレンスはすぐ側に描かれている犬よりもだいぶ小さかった。青い瞳は今と変わらず真っ直ぐで、睨むように前を見据えている。口元を引き締めていて、あどけない顔に緊張が見て取れた。

「ロレンスはあまり変わらないな」

「そうか」

少しくすぐったいような表情をしながらロレンスが頷いた。

「ユアンの小さい頃も見てみたかった」

「俺も全然変わらないらしいよ。よく言われるけど、自分ではけっこう変わったと思ってるんだけどな。背だってかなり伸びたし。小さい頃は変な歌ばかり歌っていたけど、今はそんなこともしなくなったしさ」

「ユアンはたぶん変わらないんだろう」

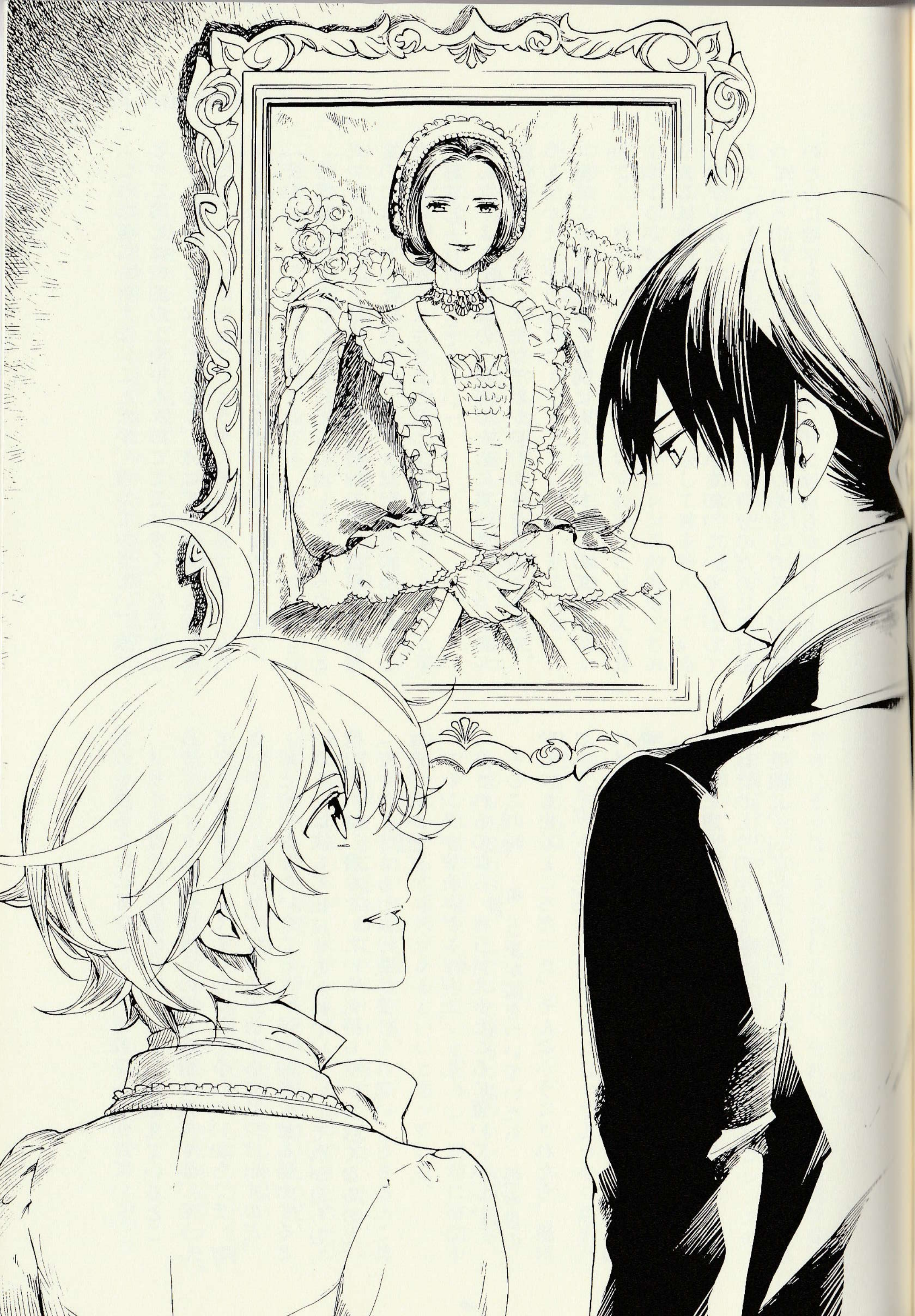
「そうかな。そう言われるとなんだか複雑だけど…」

「変な歌も聞いてみたい」

「いや、その、恥ずかしすぎるよそんなの…」

ユアンは慌てて話を変え、隣の肖像画を指さした。

「こっちはその、クラウディアさんなのかな」



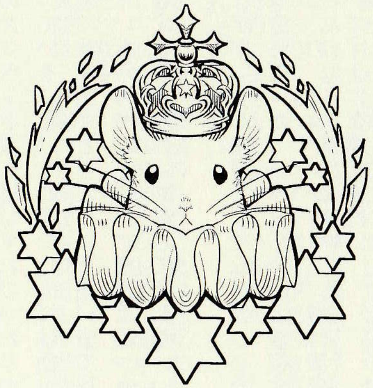
「そうだろう」
　その女性は絵の中で幸せそうにはにかんでいた。クラシックな深い緑のドレスに身を包み、白い手袋の両手を膝の上で握りしめている。濃い色の髪は緑がかった黒髪で、目だけが抜けるように青かった。ユアンはその目の色が懐かしく、顔を知らない母親もこんな目の色だったのかなと考え、そして気が付いた。彼女の目の色は自分のものとよく似ている。
「綺麗なひとだね」
　ユアンが言うと、ロレンスも絵を見上げた。
「名前がわかってよかった。オーガストに聞いたら、彼女の両親…俺の祖父母にあたる人たちはもうこの世にはいないそうだ。ひとり娘のクラウディアが暗殺された後、二人とも体調を崩して亡くなったとか」
　ロレンスが淡々というので、ユアンは胸が締め付けられるように苦しくなった。
「母は父を敵から庇って代わりに死んだと聞かされた。その敵が何者だったのかは結局分からずじまいだが、俺はそれが元七侯のロンギヌスの手のものだったのではないかと今では思っている」
　ロンギヌスは血統復古党の党首で、エルバート帝を暗殺した罪で永久牢に落とされた男である。ユアンはその執念深さを思い、身の震える心地がした。
「父が俺の存在を隠したのは、自身がずっと命を狙われていたからで、クラウディアみたいな目に遭わせたくなかったのだと思う」
「そう…だね」
「けど俺が父ならそうはしなかっただろう」
　きっぱりとした口調でロレンスがそう言ったので、ユアンは驚いて彼を見た。ロレンスは真っ直ぐにユアンを見おろして、俺なら皇帝を辞めていただろう、と再び告げた。
「大切な者を護るためならば」
「エルバート帝は…敵に屈したくなかったんだと思う」
「父のことは尊敬しているが、帝国を護る方法が俺とは違っていたのだろう。それはそれで父が生涯を賭け、貫いたのだから文句はない。だが俺は同じ生き方はできない」
　ロレンスの青い瞳が部屋の暗い灯りを受け、水底のように光を反射した。鮮烈ではないが、深くて強い輝きだ。
「俺にとってはお前を護ることが、国を護ることなのだと思う」
「俺…」
　ユアンは目を見開いた。自分は確かに皇帝なので、騎士という立場ならそうなのだろう。だが目の前のロレンスからは、それだけではない想いの強さを感じる。

「これは誰にも言えないことだが、言っておきたい。俺にとって国とは帝国の土地や人々のことではなく、ただ生きていく場所のことなのだと思う。俺はずっとそれを探していたし、ユアンに出会ってようやくそれが見つかったんだ。もしもユアンを失ったら、全てが無意味になってしまう」
「それは…」
　帝国騎士団長としては決して口に出してはならないことだった。ロレンスは決して無私の精神で命を投げ出す覚悟なのではなかったのだなと、ユアンは目が覚める思いがした。彼は己のために生きると言っているのだ。
「軽蔑したければしてもいい」
「しないよ、そんなの。帝国のために真っ直ぐだったエルバート帝だって、本当はそれが自分の生きる糧だからそうしていたんだと思う」
「俺のこんな真意は…仲間にも見せられるものではないが」
　ロレンスが視線を逸らせて呟いた。
「たぶん大丈夫だよ」
　ユアンはなぜかみんながもうそれを知っている気がしていた。そして彼らはおそらく全員が、自分のために毎日戦っているのだ。今も陛下ではギデオンやオーガストが理想のために数字と戦っていたし、ザンは自らが美しいと思うものを護るために外交という代理戦争へ出かけていく。
　メサイアは己の理想のためにユアンを鍛えているところで、タイタスはその場その場の感情を優先する。そうしてなにが起きたとしても、心からそうしたいからこそ、お互いがお互いを失わずに済む方法を必ず見つけ出すのだ。
　利己的であるということと、国や他者を護る努力するということは決して相反するものではない。それが自らの欲であれば、護りたいという気持ちは一層強くなるのだ。
「だから…今さら七侯の話は受けられない。もちろんこれは俺の我が儘だ」
　ロレンスがまたユアンを見た。
「許されるのなら、毎日見えるところに置いて欲しい」
　もしこの時、希う友が膝をついていたら、恨み言のひとつも出るところだった。そんなふうにされたら、絶対に抗えないからだ。
　しかしロレンスがそうしなかったので、ユアンはごく自然に答えることができた。
「俺も側にいて欲しいよロレンス。君がいないとすごく寂しいと思うし、食事は今より味気なくなってしまうし、俺はきっと今の半分も笑えないと思うんだ」
　正直に、己の欲に従って。

　後日、ユアンはあらためてアドニスとジュリアスと面会し、二人を前にして自分の気持ちを述べた。
　すなわち、ロレンスをまるで護衛のように側に置いているのは自分の意思ではあるが、決して彼を軽んじているわけではないこと。そうしてそれがロレンスの希望でもあること。空席のオウラード侯にはいずれぴったりの人を見つけたいと思っていること。それまで二人には助力を願いたいということ。法律上がどうだという言い訳ではなく、自分がそうしたいならちゃんと言うべきだと思ったのだ。
　そう皆に相談すると、彼らは納得してそれがいいと言ってくれた。
　とくにメサイアが「少し皇帝らしくなりましたね」と褒めてくれたのは意外だった。法律をちゃんと重視するのがいい皇帝ではないの、とユアンが言うと、彼は満足げに「そうではないですよ」と微笑んだ。
「法律上がどうのこうの迷いながら、臣下のくだらない争いを断ち切れない皇帝の方が僕は無能だと思います」
　ユアンと面会した元七侯たちは、今度は年輪を重ねた才人らしく節度あるところを見せてくれた。
　アドニスは納得したわけではなかったようだが、現役の皇帝にそうはっきり言われると、それ以上は我を通せないと判断したのか大人しく引き下がった。ジュリアスの方は幾分満足げだったが、謁見の間を出るときにロレンスの肩を叩いて出て行った。
　あとでユアンがロレンスから聞いたところによると、小声で「困ったことがあればいつでも相談に乗るぞ」と言われたそうである。ジュリアスにとっても彼が半分は愛しい人間の血を引いていることを、今になってようやく認めたのかもしれない。
　いまも相変わらず、ユアンの後ろにはロレンスが居る。ユアンは彼の居場所を護りたいと思うし、同時に帝国中の人々にもそんな場所があるといいと思っている。
　自らが生きたいと思えるところ。
　それが自分に似合わないだとか、相応しくないとか、なにもできないとか、ユアンもさんざん迷ってきたのだが、以前一度ロレンスを失いかけたときに気が付いたのだ。
　大切ならば全力で求め、護り、また求めるしかない。
　気持ちを殺したら、それは自分が死んでしまうことと同じなのだと、ユアンにもようやくそうわかったからだった。

On Your Side　おわり

Seven prince of the thousand years Labyrinth



千年迷宮の七王子
OnYourSide

読んで下さってありがとうございました！
花鶏＋相川の
以降の活動などにつきましては
Twitter@aikawayouなど
参考にしていただけると嬉しいです。

ハル有
halyou2015@gmail.com
pixivID:15890113
2017/08/20
2020/06/30 第三版

Seven princes of the thousand years Labyrinth